

ノグチゲラ 英:Okinawa Woodpecker 学:Dendrocopos noguchii

1. 分類と形態

分類: キツツキ目 キツツキ科

ノグチゲラは、長く1属1種のノグチゲラ(Sapheopipo)属に分類されてきたが、近年行われた分子系統解析の結果、アカゲラ(Dendrocopos)属とするよう提案されている(Winkler et al. 2005)。ここでは、この説を支持しアカゲラ属とする。

全長: 約30cm
 自然翼長: ♂154.9mm(149.0-160.0)N=44 ♀154.3mm(141.0-162.0)N=70
 尾長: ♂106.4mm(94.0-113.0)N=34 ♀108.8mm(99.0-116.0)N=62
 露出嘴峰長: ♂38.3mm(29.4-43.0)N=44 ♀35.7mm(27.8-40.1)N=69
 ふ蹠長: ♂29.7mm(28.4-30.9)N=43 ♀29.3mm(27.5-31.2)N=68
 体重: ♂145.0g(133.0-162.0)N=38 ♀135.2g(116.0-150.0)N=44

※ 尾崎(2011)H22年度 ノグチゲラ生態調査総括報告書より2歳以上の成鳥の計測値を抜粋

羽色:

暗い森の中では全身茶褐色に見えるが、明るい場所では下腹部や下尾筒の赤い羽毛が鮮やかである(写真1)。

また、飛翔時には風切羽に白斑が目立つ。雌雄ほぼ同色であるが、オスの頭頂は赤色で、メスは黒褐色である。メスでも後頭部や側頭部に赤色の羽毛がみられることがあり、オスと見間違えることがある。幼鳥の頭頂は、雌雄共に赤色である(写真1)。ノグチゲラと同所的に生息するキツツキはコゲラのための、見間違えることはまずない。



鳴き声:

キョツ、フィツ、フィツなど鳴く。警戒時やなわばり争い時にはギョルツと激しく鳴く。雌雄ともにドラミングを行うが、その頻度はメスで高い。



写真1. 成鳥メス(上)と巣立ち間近のヒナ。

2. 分布と生息環境

分布:

沖縄島北部の亜熱帯照葉樹林が広がる通称やんばる地域に1個体群が分布するのみである。かつては、沖縄島中部付近まで分布し、少なくとも第二次世界大戦前には名護岳まで分布していたと考えられている。しかし、戦災や戦後復興に伴う森林の乱伐、本土復帰以降の開発などにより、昭和時代の全般にわたって大きく分布域が縮小した。現在の繁殖分布域は大宜味村塩屋と東村平良を結ぶいわゆるSTライン以北に限られる。

生息環境:

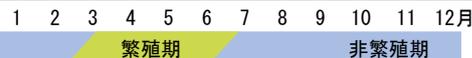
やんばる地域の与那覇岳や西銘岳、伊部岳などの脊梁部に残されたイタジイ(スダジイ)の優占する林齢40年以上の照葉樹林が主要な生息地である(写真2)。



写真2. やんばるの森(国頭村5月撮影)。

近年は、主要な生息地以外の二次林や、マツ材線虫病の被害を受けたリュウキュウマツ林など、多様な環境での営巣が確認されるようになってきている。

3. 生活史



繁殖システム:

一夫一妻制で年1回繁殖する。雌雄共に一歳から繁殖可能である。つがいの絆は強いと考えられ、10年連続でつがいを維持したと考えられるペアが1例観察されている。また、前年のつがい相手の生存が確認されている状況でのつがい相手の変更(離婚)は観察されていない。なわばり争いは基本的に同性同士で行われ、雌雄間の争いはほとんど観察されない。自分のつがい相手が争っている場に居合わせても、異性の争いに加わることはほとんど無い。

巣:

胸高直径約20cm以上のイタジイなどの心材腐朽した生立木や枯死木に営巣する。胸高直径30cm前後、巣高3~9mの営巣例が多い。巣穴入り口の直径は6~7cm程度でやや縦長の楕円形、深さは30~50cmまでの巣が多い。造巣行動は3~4月ごろに頻繁に観察されるが、11月頃から翌年繁殖するための巣穴を掘りはじめることがある。ほぼ毎年新しい巣穴を繁殖のために掘るが、古巣を再利用することもある。定住性が高く、同一個体の前年から翌年までの巣木間の距離の平均は約100mであった。1999年3月の標識後2010年まで連続して12年営巣が観察されたオスの場合、約3.5haの範囲に全ての営巣木が分布していた。12回の営巣は9本の営巣木で行われ、2回利用された営巣木と3回利用された営巣木がそれぞれ1本ずつあった。

ノグチゲラの古巣は、自ら巣穴を掘ることの出来ない二次樹洞利用種にとって重要な資源となっている。リュウキュウコノハズクやシジウカラなどの他に、外来種であるセイヨウミツバチのコロニーとして利用される場合がある。

卵, 抱卵期間:

巣立ちヒナ数が1~3羽の場合が多いことから、産卵数も同程度の数と考えられてきたが、巣内観察により2~5卵であることが明らかとなっている。4卵が最も多く、最大5卵が記録されている(写真3)。白色無斑の卵を1日1卵産む。抱卵期間は11日前後。他のキツツキ類と同様に、夜間の抱卵はオスが行う。



写真3. 5卵が確認された巣。

育雛期間, 巣立ち率:

育雛期間は約4週間、巣立ち率は約90%、巣立ちヒナ数は2羽が最も多く(写真4)、最多は4羽の記録がある。繁殖失敗の要因として、アカマタなどのヘビ類やハシブトガラスによる捕食、巣内への雨水の浸入、営巣中の巣木の倒壊などが記録されている。



写真4. 巣内ヒナ。

ねぐら:

営巣に利用された古巣をねぐら穴として利用することが多いが、イスノキの自然樹洞や、樹幹などの樹洞外でのねぐら入りの観察例もある。

4. 食性と採食行動

雑食性。巣内ヒナには、比較的大きな餌を一つずつ運んでくることが多い。餌種の同定が比較的容易なことから、ヒナへの給餌内容については良く調べられており、木の中に潜むカミキリムシなどの幼虫が多い(写真5)。また、雌雄で給餌内容が異なることが知られ、オスでは、セミの幼虫やキムラグモなど、地中に潜む節足動物を主要な餌として給餌することが記録されている。



写真5. カミキリムシの幼虫を巣に運んできたところ。

ヒナに運ぶ餌は大きな餌であることがほとんどだが、成鳥自身は、シロアリやアリなどの小さな餌も利用することが、糞の分析から明らかとなっている。亜熱帯の森林ではシロアリのバイオマスは膨大であると考えられ、シロア리를餌資源として利用できることは、島環境であるやんばるの限られた面積の森で生き抜く上で重要なことだと考えられる。その他、四季折々の植物質の餌を利用し、タブノキ、ヤマモモ、イチゴ類などの果実、イヌビワをはじめとするイチジク類、アカメガシワやハゼノキなどの実、イタジイやマテバシイなどのドングリを採餌することが記録されている。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 地上採餌と外来種問題

ノグチゲラは、「木つつき」ばかりでなく地面に降りて土をつつき、地中の餌を掘り出して食べる。地上採餌するキツツキ種は多く報告されているが、それらの種は、主にアリ類を主要な餌としており、嘴長の3倍近くある舌を持つなど、アリ類の捕食に適応した種であることが多い。土を掘ってセミの幼虫や地中性のクモを主要な餌として利用するキツツキは、ノグチゲラ以外に報告されていない。このユニークな「地つつき」行動と「木つつき」を駆使することで、ノグチゲラは地中から樹皮下に潜む虫までを餌として利用することができ、面積の限られた「やんばるの森」でこれまで生き残ることができたと考えている。「地つつき」行動は、従来、捕食者となる哺乳動物がこの島に生息しなかったために進化したと考えられる。しかし、約100年前、ネズミやハブ咬傷対策のために、主に沖縄島の南部に持ち込まれたマングースが、1990年代にはその分布域を沖縄島最北部の「やんばるの森」にまで広げ、外来種対策によって捕獲されたマングースの胃内容からは、ノグチゲラの羽が見つかるようになっている。ノグチゲラが「やんばるの森」で暮らし続けるためには、巣穴を掘るための大径木がある森林を残すことと共に、安全な地上の採餌環境を維持することが重要である。このため、飛べない鳥であるヤンバルクイナに限らず、飛ぶことができるノグチゲラにとっても、やんばる地域からのマングースの早期排除が大変重要である。

● 人の暮らしとの関わり

ノグチゲラは、沖縄県の県鳥や、東村の村鳥に指定され、沖縄の自然の象徴とも言える鳥である。現在は、国の

特別天然記念物や、国内希少種に指定されており、環境省による保護増殖事業の対象種ともなっている。ノグチゲラ研究のさきがけである故池原貞雄先生の郷里、沖縄県東村の村議会が、2010年、営巣地への立ち入り制限などを盛り込んだ「ノグチゲラ保護条例」を可決した。こうした取り組みを通じて、将来的には戦前の分布域である名護岳までノグチゲラの繁殖分布域が回復することを願っている。

6. 引用・参考文献

- 安座間安史・島袋徳正. 1984. ノグチゲラの育雛活動について. 沖縄生物学会誌 22:79-90.
- 安座間安史・島袋徳正. 1993. 沖縄島北部地域(国頭村・大宜味村・東村)におけるノグチゲラ生息状況調査. 特殊鳥類等生息環境調査IV:41-58, 沖縄県環境保健部自然保護課.
- 安座間安史・石田健. 1997. ノグチゲラとやんばるの森. BIRDER 11(6):32-36文一総合出版, 東京.
- 千羽晋示. 1969. 日本産啄木鳥の食物分析. 鳥類の食性. 第7報 山階鳥研報 5(5):55-78.
- Ikehara S., Abe T., Shimojana M., Yonashiro Y. & Miyagi. S. 1976. Nest site of Noguchigera or Okinawa Woodpecker, *Sapheopipo noguchii*. Biol. Mag. Okinawa. 14:55-60.
- 池原貞雄. 1975. 山原の森のキツツキ ノグチゲラの生態を探る. アニマ 22:8-17.
- 金城道男・中須賀常雄・馬場繁幸・大西信吾. 1988. ノグチゲラに関する研究(1) - 育雛について -. 日林九支研論集 1:167-168.
- 小高信彦・久高将和・高原建二・佐藤大樹. 2009. 沖縄島北部やんばる地域における森林性動物の地上利用パターンとジャワマンゲース *Herpestes javanicus* の侵入に対する脆弱性について. 日本鳥学会誌 58:28-45.
- 小高信彦. 2009. リュウキュウマツ枯死木に営巣したノグチゲラの繁殖失敗事例. 九州森林研究 62:98-99.
- 小高信彦. 2010. 外来種セイヨウミツバチによるノグチゲラの古巣利用. 森林総合研究所九州支所年報 22:24.
- 小高信彦. 2011. H22年度 ノグチゲラ生態調査総括報告書 第4章: 標識個体の追跡結果から, 50-71, 環境省那覇自然環境事務所.
- 小高信彦. 2011. H22年度 ノグチゲラ生態調査総括報告書 第5章: 標識個体の追跡結果から, 72-83, 環境省那覇自然環境事務所.
- NPO動物たちの病院. 2007. ノグチゲラがマングースに捕食されていることを突き止めました. <http://news.yanbaruikuina.jp/?eid560344>.
- 尾崎清明. 2011. H22年度 ノグチゲラ生態調査総括報告書 第2章: 換羽と測定値による齢と性の査定, 6-18, 環境省那覇自然環境事務所.
- Short L.L. 1973. Habitats, relationships, and conservation of the Okinawa Woodpecker. Wilson Bulltin 85(1):5-20.
- 渡久地豊. 2011. H22年度 ノグチゲラ生態調査総括報告書 第3章: 追跡調査における生態情報, 19-49, 環境省那覇自然環境事務所.
- Winkler H., Kotaka N., Gamauf A., Nittinger F. & Haring E. 2005. On the phylogenetic position of the Okinawa Woodpecker (*Sapheopipo noguchii*). J. Ornithol. 146:103-110.

執筆者

小高信彦

(独) 森林総合研究所 九州支所
森林動物研究グループ

北海道の都市緑地でのアカゲラ研究で学位をとり、さてどうしようかと考えていたところ、1999年3月にノグチゲラの標識調査に参加させてもらいました。ノグチゲラに最初に触れたとき、アカゲラの仲間では？と感じ、嘴の形態や、給餌行動から、アオゲラ属のキツツキとは縁遠いだろうと考えました。後に行われた分子系統解析では、ノグチゲラはアカゲラやオオアカゲラに近縁であると言って良い結果が得られました。今後、アジアのアカゲラ属のキツツキたちとの系統関係を明らかにし、ノグチゲラの由来に迫りたいと考えています。

